

京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要

2021

〈論文〉

中米イロパango火山の破滅的大噴火は、タスマルを中心とした
古代都市チャルチュアパを放棄させたのか？
その大噴火の絶対年代はいつなのか？

..... 柴田 潮音 1

2021年ペルー大統領・国会議員選挙
—カスティジョ急進左派政権登場の過程と「地方の叛乱」の行末—

..... 中沢 知史 39

現代におけるユカタン・マヤ系先住民間の「好き」に関する考察
—言語学及び人類学的視点からの意味分析—

..... エリ・カサノバ・モラレス／大倉 由布子 63

〈研究ノート〉

戦前日本におけるラテンアメリカ研究の見取図

—野田良治、田中耕太郎、天野芳太郎の業績、およびその他の研究の担い手—

..... 辻 豊治 89

〈研究展望・動向〉

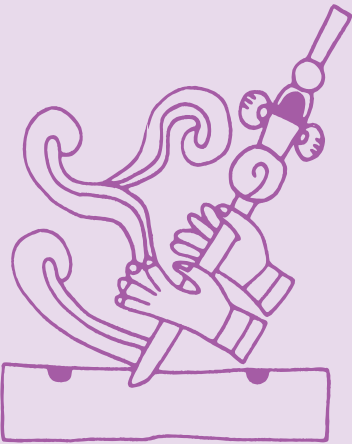
16～18世紀のマヤ研究における考古資料と文献史料の重要性と問題点

..... 白鳥 祐子 105

〈書評〉

渡邊利夫著『国際政治のなかの中南米史—実体験を通してリアリズムで読む—』

..... 牛島 万 117



〈研究展望・動向〉

16～18世紀のマヤ研究における考古資料と 文献史料の重要性と問題点

白鳥 祐子*

1 はじめに

「マヤ文明研究」と聞くと一般的に「ピラミッドの発掘」や「失われた文明の研究」のようなイメージが先行する。しかし、これらのイメージは多くの場合、古典期マヤ（後250-900年）の崩壊とその後のスペイン人による征服（後1520-1697年）によるところが大きく、「消滅した先住民文化」（Restall 2003）と捉えられることが多い。中米を訪れたことがある人ならば皆知っているだろうが、マヤの人々は現在も生活しており、彼らの文化は消滅してはいない。しかし、16～18世紀に起こったスペイン人による侵攻、征服、植民地支配の間に、マヤの人口は減少し、移住によって方々へ散り散りになった。社会全てが大きく変動したこの時期のマヤを研究する方法は、それ以前の古典期や先古典期（前1000-後250年）研究の方法論と比べると決定的に異なる。それは、文献史料の存在である。文献史料は16～19世紀スペイン人によって書かれたものと、マヤの人々によって書かれた文献があり、公的文書、絵図、手紙、随筆、歴史書と、多岐に渡っている。筆者は2007年より16～18世紀のマヤ社会の変容を明らかにするため、グアテマラ北部のペテン・イツァ湖周辺地域で考古学調査を行ってきた。また、これと並行して、2019年より、この時期の文献史料の研究にも本格的に着手した。本稿では、16～18世紀のマヤ社会を研究するにあたり、考古資料と文献史料研究を融合して研究に取り組んでいる筆者が考える重要性と問題点を、これまでの先行研究や現地調査結果から議論し、今後の研究の方向性について述べていきたい。

2 重要性と問題点

16～18世紀のマヤの人々とヨーロッパ人との接触は、植民地主義（colonialism）、文化変容（culture change）または文化接触（culture contact）の研究として位置づけられている（Chamberlain 1948; Chase and Chase 1986; Cusick 1998; Farriss 1984; Oland 2009; Palka 2009）。植民地主義はヨーロッパ人を征服者、先住民を被征服者（または被害者）としてとらえる傾向がある。しかし、筆者は、先住民側の歴史を非植民地化することで、16～18世紀の文化変容を相互作用的に考えることが重要であると考え。非植民地化とはつまり、ヨーロッパ人と先住民の力関係を再構築することであり、これまでのヨーロッパ側から先住民側への一方的な文化変容だけを見るのではなく、両者の文化変容を相互的に捉えることを目的とする（Gosden 2004）。その方法論として、考古学だけではなく、エスノヒストリー（ethnohistory）の視点（後述）を加えることで、マヤの人々がどのようにヨーロッパ人と関わっていたのか（文化接触）、また、マヤ社会がどのように変容していったのか（文化変容）を、お互いに与えた影響から相互的に再構築することが重要となってくる。先住民の歴史的事象を再構築するエスノヒストリーの分野は、発掘調査を行い、科学的根

* 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所、日本学術振興会特別研究員（PD）

拠を用いて考古資料からアプローチする考古学とは異なり、文献史料を史料批判をもとに人類学的視点から読み解き、16～18世紀の変容を長期的な事象としてとらえることができる。ただし、考古資料と文献史料を用いて16～18世紀を研究する上で、筆者が考える問題点として二つあげることができる。一つは時期区分、もう一つは考古学とエスノヒストリーの融合の問題である。

2.1 時期区分

筆者の研究する時代は16～18世紀のマヤ社会であり、地域はグアテマラ北部ペテン・イツァ湖周辺である(図1)。16～18世紀にかけて行われた、マヤ地域でのスペイン人による征服は一樣ではない。スペイン人によるアメリカ大陸侵攻により、この時期マヤ地域は大変革の時期であるが、マヤの時期区分で言うと後古典期なのか、または植民地期なのか第一に問題となる。さらに、征服された時期が地域によって異なるため、マヤ地域全体で後古典期の終わりが同一ではない。例えば、グアテマラ高地の都市国家キチェ(K'iche')がスペイン人征服者ペドロ・デ・アルバラード(Pedro de Alvarado)によって征服されるのが1524年であり、ユカタン半島北部ではフランシスコ・デ・モンテホ・イ・レオン(Francisco de Montejo y León)によって制圧されるのが1546年である。それに比べ、ペテン・イツァ湖周辺では、マヤ地域最後の都市国家イツァ(Itza)がマルティン・デ・ウルスア・イ・アリスメンディ(Martín de Ursúa y Arizmendi)によって征服されるのは1697年と、他地域よりも150年以上後のことである。16～18世紀、征服以前のイツァについて述べる時、果たしてこの時期を「後古典期」と呼べるのであろうか。この問題点の一つの解決策として、アメリカ大陸におけるコロンブス以降の時期区分として使用されている「接触期(Contact Period)」がある(Silliman 2020:43)。スペイン人によって征服される1697年まで、イツァの人々がスペイン人などのヨーロッパ人と接触していなかったわけではなく、彼らは渡来したヨーロッパの物質を自分たちの文化に取り入れながら、自治国家として生活していた。イツァの人々が文献史料に登場するのは、エルナン・コルテス(Hernán Cortés)がスペイン国王カルロス5世(Carlos V)に宛てた1526年の書簡が最初である(Cortés 1866:426; コルテス 2015:407)。コルテス一行は1525年イツァ領に到達し、当時のイツァ王カン・エク(Kan Ek')に謁見する。ペテン・イツァ湖周辺地域において、この1525年を後古典期の終わりとし、コルテスらスペイン人と接触してから1697年に征服されるまでの172年間を接触期と呼んでいる(Rice and Rice 2018)。

「接触期」という時期区分は、征服以前の先住民とヨーロッパ人との関わり合いの時期を大変都合よく説明しうる用語であるように思われるが、「接触期」の呼称に関して問題提起もされている(Silliman 2005)。例えば、特に北アメリカ先住民についての研究で、「接触期」の用語に、植民地支配へのプロセスの一過とする、コロニアリズムや政治的権力の関係性を示唆する意味合いを含む場合がある(Carlson 2000; Deagan 1998; Lightfoot 1995)。考古学において一般的に「文化接触(culture contact)」は、ある集団が外部の集団と交流する場合に用いるが、文化接触はいつの時代にどこでも起こりうる基本的な事実である(Gosden 2004)。そのため、「接触期」を用いる場合に考古学者は、コロニアリズムと同意に用いて誤解を招かないよう、十分な注意を払って用語を用いなければならない(Silliman 2005)。

しかし、マヤ地域において16～18世紀を時期区分することは、果たして正しいのであろうか。ペテン・イツァ湖周辺地域におけるこの時期の発掘調査において、ヨーロッパ製品が出土した場

合、その遺構は上限年代 (terminus post quem) により、1525 年以降に使用された遺構であると考えられる。ペテン・イツァ湖周辺地域において後古典期の土器や石器は、ヨーロッパ人との接触後も、マヤの人々によって継続して使用されたため、時期区分が難しい (Rice and Cecil 2018:219)。このような状況において、通例で後古典期／接触期／植民地期と区切ることによいような意味があるのだろうか。少なくともペテン・イツァ湖周辺地域においては、ヨーロッパ製品の有無にかかわらず後古典期から植民地期を連続して捉え、マヤの人々の暮らしを再構築することが望ましい。

ケント・ライトフット (Kent Lightfoot) は、北アメリカ大陸を研究する考古学者が、先史考古学 (prehistoric archaeology) と歴史考古学 (historical archaeology) に分かれて文化接触の時期を研究していることについて懸念している (Lightfoot 1995)。アメリカ大陸におけるヨーロッパ人と先住民との文化接触は、いくつもの地域において長期にわたって行われたことであり、別々の分野で分けて研究すると、相互に見落とししてしまう点が生じ、解釈を誤る危険性を含んでいるのである (Lightfoot 1995)。そのため、先史考古学と歴史考古学を融合して文化接触を通時的に研究することが必要で、その際、先史考古学者による詳細なエスノヒストリー研究が重要だとライトフットは考える。

2.2 考古学とエスノヒストリー

エスノヒストリーは、文献史料や口頭伝承などの歴史史料を、史料批判をもって調査する分野であり、主にアメリカ大陸におけるヨーロッパ人侵攻に対する先住民の変化や植民地化の過程を明らかにする研究に用いられている (Charlton 1981; Trigger 1978)。近年では考古学、歴史学、人類学、美術史などの他分野と融合して、北米・メソアメリカの文化接触研究が行われている (例えば Berdan et al. 2008 参照)。メソアメリカでは、エスノヒストリーで使用された文献史料は当初、スペイン語によって書かれた史料のみが扱われ、先住民がどのようにヨーロッパ文化に適応していったのかを、ヨーロッパ人の視点から分析されていた (Berdan 2009:272)。しかし、先住民側の研究も進み、地域の歴史文書や土地の権利書などの公的文書を先住民の視点から読み解き、文化接触の研究をヨーロッパ人側と先住民側の両方向から研究するようになった (Berdan 2009; Trigger 1982)。

考古学者のマイケル・スミス (Michael Smith) は、メキシコ中央高原の後古典期を研究する上で、考古学とエスノヒストリーを融合するには方法論的に難しく、この問題は十分な分析もないまま、両者のデータを並列して議論している点があると批判している (Smith 1992:52)。スミスによれば、メキシコ中央高原の後古典期研究では、エスノヒストリー学者は考古学のデータを軽視し、引用した場合も誤った解釈をしており、反対に、考古学者は歴史史料のデータに引張られ、考古学的データの判断を難しくしていると指摘する (Smith 1992:52)。筆者の研究する 16～18 世紀マヤ地域では、(英語を母語とする) 考古学者が植民地期の文献史料を引用する際、英語に翻訳された史料や、エスノヒストリー学者によってまとめられた二次資料を使用することが多く、推論に推論を重ねることがある (Smith 2008:101)。考古学者は歴史文献を使用する際、考古学データと同様に、一次史料の原典に当たることを忘れてはいけない。筆者の研究するグアテマラ、ペテン・イツァ湖周辺地域では、考古学者の他にエスノヒストリー学者 Grant・ジョーンズ (Grant Jones) が参画しており、彼の文献史料研究による *The Conquest of the Last Maya Kingdom* (1998) は、

16～18世紀のイツァを研究する筆者にとってバイブルである。しかし、このジョーンズの著書は、文献史料から導き出した彼の「解釈」であり、彼の「解釈」をあたかも「歴史的事実」として引用することはできない。我々考古学者はエスノヒストリーの解釈を引用する場合、もう少し慎重になる必要がある。考古資料の裏付けとしてエスノヒストリーによる解釈を引用するのではなく、一次文献史料に当たり、自分なりに解釈した上で引用するのが望ましい。さらに、文献史料に一致する考古資料を充実させ、エスノヒストリーと照合させる方法論の確立が必要である。例として、スマスは歴史学者フェルナン・ブローデル（Fernand Braudel）の歴史的時間の重層性における長期持続（la longue durée）の方法論を用いて、メキシコ中央高原における後古典期の社会変容を通時的に捉え、文献史料と考古資料のデータを相関的に検証できるとする（Smith 1992）。

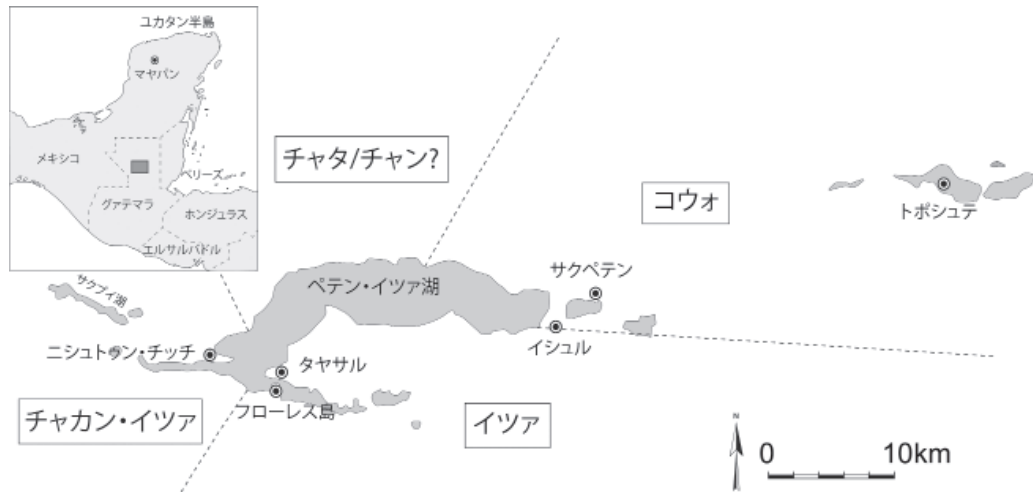


図1 ペテン・イツァ湖（グアテマラ）周辺地図 ●は現在の遺跡および現在の都市名。実線で囲まれた名称は17世紀イツァ王国を構成していた集団名とその推定領域。

3 考古資料と文献史料からみた16～18世紀のイツァ王国

これまで考古学者からみた、16～18世紀のマヤ地域を研究する上での問題点を述べてきたが、ここで考古資料と文献史料の整合性を検証する例として、筆者が研究するイツァ王国について考古学とエスノヒストリー両方の研究成果から考えてみる。

グアテマラ北部、ペテン・イツァ湖周辺は北部に丘陵地、南部にサバンナが広がっており、東西には8つの湖が80キロメートルに渡って連なっている（図1）。8つの湖の中で一番大きなペテン・イツァ湖南部に浮かぶ島を中心に、後古典期（950-1525年）の間、都市国家が栄えていた。古典期の終わりの混乱の時代は、大都市が放棄され、多くの人々が移動し、社会が大きく変容した。その中で、ペテン・イツァ湖周辺では、古典期の混乱を生き抜いた土着の集団に、ユカタン北部から南下してきたいくつもの集団が合流し、後古典期のイツァ王国が繁栄した。ペテン・イツァ湖南部に浮かぶ島はタイツァ（Tayza または Taiça）と呼ばれ、首都が置かれた。これまでの文献

史料研究から、17世紀終わり頃のイツァ王国は、アハウ・カン・エク王 (Ajaw Kan Ek') が首都タイツァで王国を統治していたことがわかっている (Jones 1998)。イツァ王国は、ペテン・イツァ湖の周りに東西南北に領土を持っており、東側にはコウォ (Kowoj)、西側にはチャカン・イツァ (Chak'an Itza)、南側にはイツァ、北側にはチャタまたはチャン (Chata/Chan) と呼ばれる集団がいた。4つの集団は血族集団であり、イツァ王国は血族集団による連合国であったと考えられている (Rice and Rice 2018)。1697年の征服時、アハウ・カン・エクは自分の祖先はチチェン・イツァ (Chich'en Itza) から来たたと述べている (Archivo General de Indias, Sevilla, 以下 AGI と略す, Guatemala 151B, No. 2; López de Cogolludo 1971:II:256-257; Jones 1998:11, 430 n22; Roys 1962:67; Villagutierrez Soto-Mayor 1933:351)。コウォもまたユカタン半島のタンカブ ("Tancab" は後古典期の都市マヤパンであると推定されている) から来たたと話している (AGI, Escribanía de Cámara 339B, No. 18; Jones 1998:11, 430 n24)¹⁾。コウォの領主 (Aj Kowoj) は親族でありながら、アハウ・カン・エクやイツァの集団に敵対していた。1525年にコルテス一行がイツァ領を通過して以来、何度かスペイン人修道士が改宗を目的に訪れているが、イツァ王国は、スペイン人によって支配されていた地域からは地理的に離れていたため、スペイン人による侵入を阻んで自治を続け、1697年3月13日にマルティン・デ・ウルスア・イ・アリスメンディによって征服される (AGI, Guatemala 151B, No. 2)。

ペテン・イツァ湖周辺地域の発掘調査は1960年代より断続的に行われており、イツァ王国の様相が考古学の視点から明らかになりつつある (Chase 1983; Pugh et al. 2012; Rice and Rice 2009, 2018; Shiratori 2019)。これまでに建造物形式の配置パターンに、湖東側と西側で相違があることが確認されている (Pugh 2009; Rice and Rice 2009; Shiratori 2019)。例えば、ユカタン半島北部のマヤパン遺跡で多く見られる、テンプル・アセンブリッジ (temple assemblage) と呼ばれる祭祀建造物の配置パターンの派生形が、湖東側の遺跡で見られるが、西側では見られない (まだ確認されていない) (Pugh 2009; Shiratori 2019) (図2)。湖東側は文献史料からコウォの領地であることがわかっており、この配置パターンはコウォに共通する建造物形式であると考えられている (Pugh 2009)。征服後の遺構としてサン・ベルナベ伝道村 (Misión San Bernabé) とサン・ヘロニモ伝道村 (Misión San Jerónimo) が発見・調査されている (Pugh et al. 2012, 2016; Rice 2009a)。首都タイツァが置かれた現フローレス島でのこれまでの調査では、ヨーロッパ製品の出土はそれほど多くなく、征服後スペイン人の居住が希薄だった様子がうかがえる。

文献史料と考古資料のデータを突き合わせると、ペテン・イツァ湖の東側コウォ領と西側チャカン・イツァ領では、建造物配置が異なる。文献史料ではコウォはイツァに対して敵対していたことが分かっており、異なる建造物配置がこの対抗心を反映したものなのかは不明であるが、コウォは明らかに他の集団との差異を明確にしていたと言える (Rice 2009b)。コウォの建造物配置は、彼らの祖先が住んでいたと主張するマヤパン遺跡と類似しているが、イツァやチャカン・イツァが彼らの祖先の出自の地であるというチチェン・イツァとの物質的な類似性は少ない (Shiratori 2019)。このことから、コウォはイツァとの差異を強調するために自分たちの出自を利用したと推測する (Rice 2009b; Shiratori 2019)。さらに、文献史料と考古資料の両方のデータの結果、サン・ベルナベ伝道村とサン・ヘロニモ伝道村の位置を特定することに成功している (Pugh et al. 2012, 2016; Rice 2009a)。

これまでペテン・イツァ湖周辺地域の文献史料調査は、前述のとおりエスノヒストリー学者の

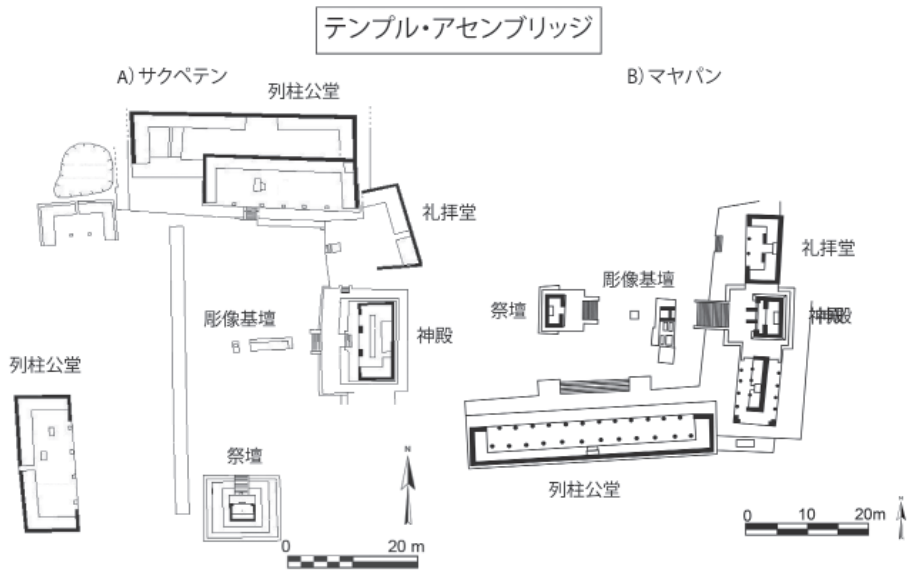


図2 後古典期後期の祭祀建造物の配置パターン（テンプル・アセンブリッジ） A) ペテン・イツァ湖東サクペテン遺跡のグループ A（Pugh 2001:301Figure7-1 より改変）、B) ユカタン北部マヤパン遺跡のグループ Q-145（Pollock et al. 1962:Map より改変）。神殿と礼拝堂は東側に位置して同一であるが、それ以外の配置が異なっている。

ジョーンズが行ってきており、我々考古学者は彼の研究成果をもとに、考古資料を突き合わせて来た。しかし、筆者が取り組んでいる研究（後述）にあたり、ジョーンズによってまとめられた研究書だけでなく、実際の文献史料を読まなければ確認できないイツァの人々の関係性について、融合的研究を行うに至った。

4 今後の研究の展開

筆者はこれまで、ジョーンズの研究に語られている、イツァとコウォの対立関係を考古学的に証明しようと研究しており、考古資料から対立関係を明らかにするデータの収集を進め、16～18世紀のイツァ王国の再構築を試みている²⁾。対立関係について文献史料に直接あたることにより、さらに詳細なイツァの人々の関係性を読み解く必要がある。またその対立関係を考古資料から立証するためには、これまでの建造物配置パターンの差異や土器・黒曜石の流通経路の相違以外にも埋葬や祭祀儀礼に関する考古資料のデータが必要であると考えられる。

16～18世紀マヤを研究するにあたり、時期区分をヨーロッパ製品の出土有無によって後古典期／植民地期と区切るのではなく、この時期を連続する過渡期と捉える「接触期」という時期区分は、ペテン・イツァ湖周辺において妥当であると筆者は考える。また、ヨーロッパ製品の出土がない層位の年代測定が問題となるが、それには炭素年代測定が有効である。より確実な木炭を炭素年代測定し、これらの炭素年代に土器編年を加えて、16～18世紀の土器をより精緻に測定

することにより、これまで後古典期（後 1525 年以前）と考えられてきた遺構が接触期以降のものとして捉えることが可能となる。

文献史料研究では、スペイン人による首都陥落後のイツァの人々の動向に関する記述から、彼らの敵人への対処方法を探り、イツァとコウォの対立関係を考古資料からの立証を試みる。文献史料と考古資料の整合性の検証には、スミスが用いたブローデルの「長期持続」の観点から融合的研究の方法論の確立を目指す。

5 おわりに

一般的に「消滅した」と思われてしまうマヤ文化の一大過渡期、スペイン人到来による 16～18 世紀の大変動の時期を研究するにあたって、文献史料の存在は大きい。しかし使い方を誤ると、間違った解釈になってしまう。さらなる考古資料データの充実と、文献史料研究との整合性を検証する方法論の確立が必要であると筆者は考える。その例として、16～18 世紀を通時的に捉える「長期持続」の理論を用いて、伝統的な時期区分にとらわれずにイツァの社会変容を議論できると考える。史料に登場するペテン・イツァ湖周辺の「イツァ」とは一体何だったのか、どのように歴史的な社会変動を生き抜いたのか、様々なデータから今後明らかにしていきたい。

注

- 1) タンカブ (Tancab) は Tancab として文献に登場する、後古典期の遺跡マヤパン (Mayapán) であると推定されている (Jones 1998:430-431 n24; Roys 1967:84)。
- 2) 本研究は、JSPS 特別研究員奨励費 (研究課題番号: 19J02048) の助成を受けたものである。

参考文献

Avendaño y Loyola, fray Andrés de

1997 *Fray Andrés de Avendaño y Loyola: "Relación de las dos entradas que hice a la conversión de los gentiles ytzáex, y cehaches"*. Temis Vayhinger-Scheer(ed.), Anton Sauerwein, Möckmül, Germany.

Berdan, Frances F.

2009 "Mesoamerican Ethnohistory". *Ancient Mesoamerica* 20(2):211-215.

Berdan, Frances F., John K. Chance, Alan R. Sandstrom, Barbara L. Stark, James Taggart, and Emily Umberger(eds.)

2008 *Ethnic Identity in Nahua Mesoamerica: The View from Archaeology, Art History, Ethnohistory, and Contemporary Ethnography*. University of Utah Press, Salt Lake City.

Carlson, Catherine C.

- 2000 "Archaeology of a Contact-Period Plateau Salishan Village at Thompson's River Post, Kamloops, British Columbia". Michael S. Nassaney and Eric S. Johnson(eds.), *Interpretations of Native North American Life: Material Contributions to Ethnohistory*. University Press of Florida, Gainesville, pp. 272-295.

Chamberlain, Robert S.

- 1948 *The Conquest and Colonization of Yucatan: 1517-1550*. Publication 582, Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.

Charlton, Thomas H.

- 1981 "Archaeology, Ethnohistory, and Ethnology: Interpretive Interfaces". *Advances in Archaeological Method and Theory* 4:129-176.

Chase, Arlen F.

- 1983 "A Contextual Consideration of the Tayasal-Paxcaman Zone, El Peten, Guatemala". Unpublished Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Chase, Diane Z., and Arlen F. Chase

- 1986 "Archaeological Insights on the Contact Period Lowland Maya". Miguel Rivera Dorado and Andrés Ciudad Ruiz(eds.), *Los Mayas de tiempos tardíos*. Sociedad Española de Estudios Mayas e Instituto de Cooperación Iberoamericana, Madrid, pp. 13-30.

Cortés, Hernán

- 1866 *Cartas y relaciones de Hernán Cortés al emperador Carlos V: corregidas e ilustradas por don Pascual de Gayangos*. Imprenta Central de los Ferro-Carriles A. Chaix y C^a, Paris.

Cusick, James G.(ed.)

- 1998 *Studies in Culture Contact: Interaction, Culture Change, and Archaeology*. Occasional Paper No. 25, Center for Archaeological Investigations, Southern Illinois University, Carbondale.

Deagan, Kathleen

- 1998 "Transculturation and Spanish American Ethnogenesis: The Archaeological Legacy of the Quincentenary". James G. Cusick(ed.), *Studies in Culture Contact: Interaction, Culture Change, and Archaeology*, Occasional Paper, No. 25. Center for Archaeological Investigations, Southern Illinois University, Carbondale, pp. 23-43.

Farriss, Nancy M.

- 1984 *Maya Society Under Colonial Rule: The Collective Enterprise of Survival*. Princeton University Press, Princeton

Gosden, Chris

- 2004 *Archaeology and Colonialism: Culture Contact from 5000 BC to the Present*. Cambridge

University Press, Cambridge.

Jones, Grant D.

1998 *The Conquest of the Last Maya Kingdom*. Stanford University Press, Stanford.

Lightfoot, Kent G.

1995 "Culture Contact Studies: Redefining the Relationship between Prehistoric and Historical Archaeology". *American Antiquity* 60(2):199-217.

López de Cogolludo, Diego

1971 *Los tres siglos de la dominación española en Yucatán, o sea historia de esta provincia*. 2 vols, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, Graz, Austria.

Oland, Maxine H.

2009 *Long-Term Indigenous History on a Colonial Frontier: Archaeology at a 15th-17th Century Maya Village, Progresso Lagoon, Belize*. Unpublished Ph.D. dissertation, Northwestern University, Evanston, IL.

Palka, Joel W.

2009 "Historical Archaeology of Indigenous Culture Change in Mesoamerica". *Journal of Archaeological Research* 17:297-346.

Pollock, H. E. D., Ralph L. Roys, Tatiana Proskouriakoff, and A. L. Smith (eds.)

1962 *Mayapan, Yucatan, Mexico*. Publication 619, Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.

Pugh, Timothy W.

2001 "Architecture, Ritual, and Social Identity at Late Postclassic Zacpetén, Petén, Guatemala: Identification of the Kowoj". Unpublished Ph.D. dissertation, Southern Illinois University at Carbondale, Carbondale.

2009 "Residential and Domestic Contexts at Zacpetén". Prudence M. Rice and Don S. Rice (eds.), *The Kowoj: Identity, Migration, and GeoPolitics in Late Postclassic Petén, Guatemala*. University Press of Colorado, Boulder, pp. 173-191.

Pugh, Timothy W., J. Rómulo Sánchez P., and Yuko Shiratori

2012 "Contact and Missionization at Tayasal, Petén, Guatemala". *Journal of Field Archaeology* 37(1):3-19.

Pugh, Timothy W., Katherine Miller Wolf, Carolyn Freiwald, and Prudence M. Rice

2016 "Technologies of Domination at Mission San Bernabé, Petén, Guatemala". *Ancient Mesoamerica* 27(1):49-70.

Restall, Matthew

2003 *Seven Myths of the Spanish Conquest*. Oxford University Press, Oxford.

Rice, Prudence M.

2009a "Mound ZZ1, Nixtun-Ch'ich', Petén, Guatemala: Rescue Operations at a Long-Lived Structure in the Maya Lowlands". *Journal of Field Archaeology* 34:403-422.

2009b "The Kowoj in GeoPolitical-Ritual Perspective". In Prudence M. Rice and Don S. Rice(eds.), *The Kowoj: Identity, Migration, and Geopolitics in Late Postclassic Petén, Guatemala*. University Press of Colorado, Boulder, pp. 21-54.

Rice, Prudence M., and Leslie G. Cecil

2018 "Postclassic Pottery and Identities". Prudence M. Rice and Don S. Rice(eds.), *Historical and Archaeological Perspectives on the Itzas of Petén, Guatemala*. University Press of Colorado, Boulder, pp. 205-226.

Rice, Prudence M., and Don S. Rice(eds.)

2009 *The Kowoj: Identity, Migration, and Geopolitics in Late Postclassic Petén, Guatemala*. University Press of Colorado, Boulder.

2018 *Historical and Archaeological Perspectives on the Itzas of Petén, Guatemala*. University Press of Colorado, Boulder.

Roys, Ralph L.

1962 "Literary Sources for the History of Mayapan". H. E. D. Pollock, Ralph L. Roys, Tatiana Proskouriakoff, and A. L. Smith(eds.), *Mayapan, Yucatan, Mexico*, Publication 619. Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C., pp. 25-86.

1967 *The Book of Chilam Balam of Chumayel*. University of Oklahoma Press, Norman.

Shiratori, Yuko

2019 "Constructing Social Identity through the Past: The Itza Maya Community Identity through the Late Postclassic Period(1250-1525 CE)". Unpublished Ph.D. dissertation, The Graduate Center, City University of New York, New York.

Silliman, Stephen W.

2005 "Culture Contact or Colonialism? Challenges in the Archaeology of Native North America". *American Antiquity* 70(1):55-74.

2020 "Colonialism in Historical Archaeology: A Review of Issues and Perspectives". Charles E. Orser, Andrés Zarankin, Pedro P. A. Funari, Susan Lawrence, and James Symonds(eds.), *The Routledge Handbook of Global Historical Archaeology*. Routledge, London, pp. 41-60.

Smith, Michael E.

1992 "Rhythms of Change in Postclassic Central Mexico: Archaeology, Ethnohistory, and the Braudeian Model". A. Bernard Knapp(ed.), *Archaeology, Annales, and Ethnohistory*. Cambridge University Press, Cambridge, pp. 51-74.

2008 “Review of *The Postclassic to Spanish-Era Transition in Mesoamerica: Archaeological Perspectives* by Susan Kepecs and Rani T. Alexander”. *Latin American Antiquity* 19(1):100-101.

Trigger, Bruce G.

1978 “Ethnohistory and Archaeology”. *Ontario Archaeology* 30:17-24.

1982 “Ethnohistory: Problems and Prospects”. *Ethnohistory* 29(1):1-19.

Villagutierre Soto-Mayor, Juan de

1933 *Historia de la conquista de la provincia de el Itzá: reducción, y progresos de la de el Lacandón, y otras naciones de indios bárbaros, de las mediaciones de el reyno de Guatemala, a las provincias de Yucatán, en la América Septentrional*. Biblioteca "Goathemala", Guatemala.

エルナン・コルテス

2015 『コルテス報告書簡』、伊藤昌輝訳、法政大学出版局。

未公刊史料

Archivo General de Indias, Sevilla

“Declaración que hace el Capitán Don Marcos de Abalos y Fuentes de lo que ha habido, hay, y puede haber en la provincia del Itza, 10 marzo 1704”. Escribanía de Cámara de Jsticia, 339B, No. 18, fs. 28r-60v.

“Certificación de los cabos y oficiales de guerra, 14 marzo 1697”, Audiencia de Guatemala, 151B, No.2. fs. 25v-26r.

BOLETÍN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

2021

< ARTÍCULOS >

¿La erupción catastrófica del Volcán Ilopango en El Salvador Centroamérica habría forzado a los habitantes de Chalchuapa a abandonar el centro ceremonial Tazumal?, ¿Cuál es el fechamiento absoluto de la erupción volcánica?
..... Shione SHIBATA 1

Elecciones Generales de Perú de 2021:
el proceso del surgimiento de la izquierda radical y el futuro de la “subversión
de provincias”
..... Tomofumi NAKAZAWA 39

Reflexiones en torno a la significación de frases de “gusto” en maya yucateco
actual: una perspectiva lingüística y antropológica
..... Elí CASANOVA MORALES/Yuko OKURA 63

< ESTUDIOS PRELIMINARES >

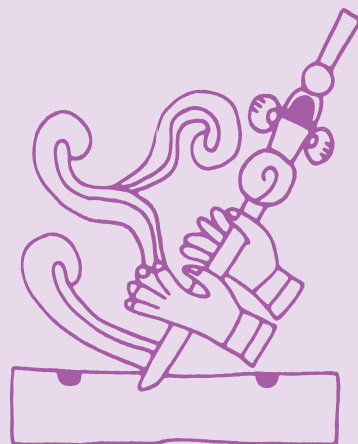
Esbozo de los estudios latinoamericanos en el Japón de la preguerra
— Los logros de Ryoji Noda, Kotaro Tanaka, Yoshitaro Amano y otros autores —
..... Toyoharu TSUJI 89

< INFORME DE INVESTIGACIÓN >

The Use of Both Archaeological Data and Historical Documents
in Studies of the 16th-18th Century Maya: Importance and Issues
..... Yuko SHIRATORI 105

< RESEÑA DE LIBROS >

*Historia latinoamericana en la política internacional:
a través de la perspectiva de realismo basada en la experiencia real* por
Toshio Watanabe
..... Takashi USHIJIMA 117



Vol.
21